

教職大学院の学修成果に係るポスターセッション発表者一覧

平成28年度

番号	大学院名	区分	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
1	岩手大学 大学院	大学院 1年	クロサカ 黒坂 優	ストレートマスター	中学校理科における「気象数値実験モデル」を用いた教材に関する実践的研究
					中学生にとって実感を持った理解が難しいとされる理科の気象領域において、数値実験を用いた教材の開発により、気象現象の理解を目指すことを目的とする。 雲解像度モデルCReSSを用いて、教育版の数値実験教材「Web-CReSS for Education」を開発した。数値実験の条件設定が容易で、設定の意味を理解しやすいソフトである。また、条件設定を必要最低限に絞ることで現象の変化を考察しやすくなった。生徒の気象現象への興味関心、理解への成果が見られた。
2	群馬大学 大学院	修了生	ウエダ 上田 ゴウ剛	前橋市教育委員会事務局 学校教育課 教職員係 主任兼管理主事	知識や技能を活用する力を育む中学校社会科学習指導 －「社会科カード」を取り入れたパフォーマンス課題を単元のまとめとして－
					中学校社会科は「暗記教科」というイメージがあり、それが学習意欲の低下につながっている。この課題を解消するために、知識や技能を総合して使いこなすパフォーマンス課題を単元のまとめに取り入れた。知識を再生するだけでなく活用させる活動を通して、社会科の面白さに気付かせることにより、最終的には学習観を変えて意欲を向上させることを目指した。そのために「社会科カード」を知識の習得や思考ツールとして活用した。
3	埼玉大学 大学院	大学院 1年	ナカマルオ 中園尾 リク陸	ストレートマスター	プロジェクトマネジメントの手法を取り入れた「材料と加工に関する技術」の指導過程の提案
					社会におけるものづくりは、販売目標を設定し、材料の入手、コスト、製作期間、作業工程、利益計算などについて考えた上で製品が作られている。しかし、中学校技術・家庭科では、これらを考える場面が少ない。そこで、実社会のものづくりにより近い形で授業を展開するために、プロジェクトマネジメント的な手法を取り入れ、チーム単位で組織的に学習する指導過程を提案する。
4	東京学芸大学 大学院	大学院 1年	タナカ 田中 ヒロミ英海	立川市立幸小学校 主任教諭	子供が新たな疑問や問いをもつ算数科学習指導の研究 －他者モニタリングを促す検討場面の在り方－
					子供が新たな疑問や問いをもつ算数科学習指導について、メタ認知的活動、特に他者モニタリングから考察する。先行研究では、他者の発言を要因としたメタ認知によるずれが「問い」を生起させるとある。しかし、本研究では他者の発言をもとにメタ認知できる子供は一部に限られている実態が明らかになった。そして授業実践から、表現活動を適切に取り入れることで、その他者モニタリングの改善が図れることが示唆された。
5	創価大学 大学院	修了生	カワシマ 川島 紀子	文京区立文林中学校 主任教諭	中学校理科教育における学校と博物館・科学学習センターとの連携に関する研究
					現行の中学校学習指導要領（理科）では、博物館や科学学習センター等との積極的な連携・協力が初めて明記されたが、学校現場の実態は極めて低調である。本発表では、連携に基づき行った学習指導の有効性の検証と、阻害要因の追究を目的として行った教員や学芸員等を対象にした調査分析の結果を報告する。教員が専門家と知恵を出し合い、知的好奇心に溢れた生徒の育成を図る教育連携を目指し、今後の連携強化の在り方を提案したい。
6	玉川大学 大学院	大学院 1年	タカハシ 高橋 コウイチ浩一	練馬区立大泉学園緑小学校 教諭	小学校高学年の英語科導入における教員研修の一考察 ～教員のクラスルームイングリッシュ不安解消研修～
					本研究の目的は、文部科学省が進めようとしている英語授業の要点、また、それに伴う児童・生徒・小学校教員の意識や現状における課題を明らかにし、それを解決する一具体策として小学校教員研修の在り方を提案することにある。 特に小学校教員のクラスルームイングリッシュ不安を解消させ、コミュニケーション活動を促す英語授業を展開させるための研修を提案する。
7	山梨大学 大学院	大学院 2年	イシガキ 石坂 タカミチ隆至	山梨県立韮崎高等学校 教諭	「歴史アクティビティ」で改善する高校世界史授業
					高校世界史の授業は知識の教授に留まっている場合が多い。生徒は知識を活用する機会がほとんどないため、歴史的思考力が育ちにくい状況にある。そこで、生徒が知識を活用し深められるようにするために現実的に授業をどのように変えればよいか明らかにしたいと考えた。本研究では、生徒が史料の解釈などを行う「歴史アクティビティ」を組み込むことで授業を改善しようと取り組んでおり、今回の発表では、その具体的事例を紹介する。
8	静岡大学 大学院	大学院 2年	タカギ 高木 ユカ由香	富士市立広見小学校 教諭	教師の授業力量形成を図る学年部研修の推進 －小学校国語科の単元開発と評価の過程に焦点をあてて－
					小学校国語科の文学教材（宮沢賢治作品）を対象に、宮沢賢治の世界観を深くとらえ概念の拡張を図ることを目指した単元を、アクションリサーチ校の学年部とで協働で開発・実践を行った。子どもたちのポートフォリオを用いた事後研修等から多くの教員から本単元開発の有効性について意見が出され一定の効果が確認された。
9	島根大学 大学院	大学院 1年	コバヤシ 小林 ヨウスケ裕介	安来市立第一中学校 教諭	中学校社会科地理的分野における世界の諸地域「アジア州」の授業デザイン ～アジア州の多様性を追求する授業の構築～
					アジア州は、広大で気候も場所により大きく異なり、そこに世界の総人口の約6割が生活していることから、産業、民族、生活・文化など様々な面で多様性に富んだ地域である。本単元では、アジアの地域的特色を明らかにするために、主題を「重層的に見たアジアの多様性」とし、「世界の中のアジア」、「アジアの中の多様性」、「アジアの中の一国の多様性」に注目し、追求する。方法論として本時では知識構成型ジグソー法を用いて自分の考えを深め、アジア州の特徴について自分の言葉で説明できるようにした。
10	長崎大学 大学院	大学院 2年	モトムラ 本村 コウキ洗樹	ストレートマスター	コミュニケーション活動につながる文法指導 －中学校で習得する現在及び過去進行相、動名詞、分詞形容詞用法に関して－
					本実践研究発表では、生徒が、教師による文法指導に基づいて、英語を用いたコミュニケーション活動を円滑に行うことができるような授業作りについて考察する。具体的には「コミュニケーション活動につながる文法指導」というテーマのもと、動詞の-ing形を取りあげ、中学校で習得する現在及び過去進行相、動名詞、分詞形容詞用法に関する文法指導がコミュニケーション活動においてどのように活かされるのかを議論する。

教職大学院の学修成果に係るポスターセッション発表者一覧

平成28年度

番号	大学院名	区分	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
11	聖徳大学 大学院	大学院 2年	ウルシバタ ハルエ 漆畑 治枝 ナミカワ ケイコ 浪川 佳子 サワダ ユキ 澤田 由佳	ストレートマスター	片付け場面における5歳児の思考 本研究は、保育場面の中で日常的に行われている片付けの中で、5歳児の思考に着目し、その内容を明らかにするとともに、5歳児を担任している保育者の片付けに対する意識及びその指導について探求したものである。その結果、以下の2点が明らかとなった。①経験、片付ける物や場所、スペース等の環境、一緒に遊んだ友達によって5歳児の思考が引き出される。②片付けにおいては、保育者の実践知が最も発揮されている。
12	早稲田大学 大学院	修了生	スズキ ヒロム 鈴木 啓	新潟市立五十嵐中学校 教諭	体験活動と言語活動を結び付けるクロスカリキュラム開発 —職場体験を題材にしたエッセイ・ライティングを通して— 2年間の公立中学校での実習を通して、子どもたちは、英語で自分の思いや考えを表現することに苦手意識を持っていることが分かった。そこで、職場体験学習と英語の授業を連携させ、体験活動と言語活動を結びつけた。その結果、生徒の表現する意欲が高まったことが、質的・量的分析から結論づけられた。本成果発表では、英語と総合的な学習の時間のクロスカリキュラムの開発と、その実践について紹介したいと考えている。
13	上越教育大学 大学院	大学院 2年	タカハシ ケンイチ 高橋 健一	上越市立春日小学校 教諭	自治的集団を育むシステムの構築 アクティブ・ラーニング時代の学校教育では、子どもの学びの質を高めるために生活づくりと授業づくり両方の視点から自治的集団を志向することが必要であると考え。その営みは、「主体的・対話的で深い学び」そのものであり、教師と子どもの信頼関係と子ども同士の信頼関係を土台として、学級目標を中心に挑戦と省察を繰り返す「自治的集団を育むシステム」が、子どもたちの学習意欲を高めるかを検証した。
14	金沢大学 大学院	大学院 1年	ツチダ トモフ 土田 友信	金沢市立鳴和中学校 教諭	ユニバーサルデザインの授業づくり ～リズム感あふれる活気のある全員参加の授業づくり～ 近年、発達障害の疑いを持つ生徒の言動が授業中に他の生徒に影響を与えることが多くあるように感じられ、その対応に困難を抱える教師が多い。本研究は、英語特有のリズムや音楽、また動きといった要素を授業に取り入れることで、多様性を持つ生徒が集まる一つのクラスを飽きさせず、学びを深めて全員参加の授業を目指す研究報告である。
15	愛知教育大学 大学院	大学院 2年	オオヤマ カズノリ 大山 和則	知立市立八ツ田小学校 教諭	地域社会を理解して、自分の考えを表現する児童の育成 —対話と評価の充実を通して— 地域の実態を示す資料の提示や地域の人々との対話の充実を図り、地域社会の理解と資料活用 の技能習得を図った。また、単元の終末に成果物（新聞）を作成する場を設け、思考力・判断力・表現力等の育成を図った。その際、事前に示した評価基準により、自己評価や相互評価をすることで、児童は、地域社会について理解したことをもとに、生活を見直し、自分ができることを考えて表現することができた。
16	兵庫教育大学 大学院	修了生	ウシジマ トシオ 牛島 敏雄	三木市立緑ヶ丘小学校 教諭	生活場面に即した作問指導による問題解決能力の育成 —高学年の算数科における「自ら誤りに気づき訂正する能力」に焦点化した授業開発— 現任校の課題として、算数科の文章問題で数値とキーワードのみを安易にひろい、計算してしまうため、不自然な解答になっても気づかない現状があった。そこで、子ども自身が問題と生活場面とをつなげて、誤りに気づき、訂正する能力を身につけるため、「誤りを訂正する活動」「数量感覚を養う活動」「作問活動」といった手法を実践した。結果として、安易な計算だけでは解けない問題の正答率が上昇し、不自然な解答が減った。
17	岡山大学 大学院	大学院 2年	サカキ タカヒロ 坂 孝博	新庄村立新庄中学校 教諭	生徒の「生きる力」を育む、「ふるさと新庄学」の創造 ～総合的な学習の時間と小中連携の実践を通して～ 本研究では、総合的な学習の時間を体験的な学習から、「サービスマスター」の手法「小中・地域・学校間連携」を取り入れた、継続的で探究的な学習への転換に取り組んでいる。そこでの、郷土愛や学びを社会に生かそうと主体的に課題を見付け、解決していこうとする態度を育てるための学習活動全体を「ふるさと新庄学」と位置づけ、実践化を試みると共に、この活動が教師の学びや成長を促し、学校改善に資することの考察も行う。
18	広島大学 大学院	大学院 1年	ムラカミ リョウタ 村上 良太	三原市立三原小学校 教諭	児童の概念変容を促す算数科授業の開発研究 —認知的葛藤の生起と解消に焦点をあてて— 本研究では、研究仮説（「認知的葛藤の生起と解消の場を保障すれば、児童は既存の概念をより客観的・科学的概念へと変容させるだろう。」）の実践・検証を通して、算数科授業における認知的葛藤を生起させ、解消するための指導原理を明らかにすることを目的とする。実験授業を実施した結果、開発した葛藤教授アプローチ・学習過程モデルや、実験授業における手立てが望ましい概念変容を促す可能性があることが示唆された。
19	香川大学 大学院	大学院 1年	ハラ ヨウコ 原 洋子	玉野市立荘内小学校 教諭	道徳に関する多様な学びを生かした授業改善 ～授業・実習・教職実践研究、かがわ道徳ラボの学びから～ 道徳の教科化に向けて、授業・実習、理論と実践の往還をめざす教職実践研究を通して、自らの授業力向上に取り組んでいる。自らの課題を発話分析やS-T分析等で改善を試みている。さらに、教職大学院と県教育センターとの連携で、道徳教育に関する教員の資質向上に係るプログラム「かがわ道徳ラボ」にも参加して、貴重な学びを積み重ねている。各々の学びをつなげて、大学院での成果を所属校や地域の道徳教育向上につなげたい。
20	宮崎大学 大学院	大学院 1年	ナカニシ スグル 中西 英	宮崎市立加納小学校 指導教諭	KBDEXを用いた発話分析による思考過程の解読と分析手法の確立 本研究は、KBDEX (Knowledge Building Discourse Explorer) の略で、対話データから共同体の知識の進展と個人の貢献を可視化・数量化することができるソフトウェアを用いて、算数の授業における学習者と指導者の発話分析を行い、学習集団や学習者個々の知識がどのように構成されたのか、その過程を明らかにすることで思考過程の解読と分析手法の確立をめざすものである。

教職大学院の学修成果に係るポスターセッション発表者一覧

平成28年度

番号	大学院名	区分	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
21	北海道教育大学大学院	修了生	オオタ タカユキ 太田 貴幸	旭川市立新町小学校 教諭	カリキュラム・マネジメントによる学校改善の理論と実践に関する研究 —教務主任による教職員の協働を基盤とした学校課題解決へのアプローチ— 学習指導要領の理念の実現や各学校特有の課題解決のため、カリキュラム・マネジメントの重要性が改めて指摘されており、中でも教務主任は、教職員が協働して教育活動を推進する際の要の一人である。そこで本研究では、学校経営方針に基づいた教育課程の編成・実施・評価・改善に関連する各実践を基に、カリキュラム・マネジメントの進行管理について、教務主任の役割の重要性とポイントを明らかにした。
22	宮城教育大学大学院	修了生	タケウチ オサム 竹内 治	大崎市立沼部小学校 教諭	中学校区を軸とした防災教育の確立 東日本大震災では、日本全体に多くの衝撃を与えた。特に学校現場では、改めて学校防災の在り方を考え直す機会となっている。本研究は、中学校区を軸とした防災教育の確立を目的としている。ハード面の復興は、国や地方自治体が責任をもって進める一方、防災教育（ソフト面）は、国や地域の未来を切り拓く子どもを育てる上でも、学校が責任をもって取り組んでいくべき課題である。その上で、本研究が少しでも防災教育の推進に役立てばと願っている。
23	茨城大学大学院	大学院1年	キョウノ マサト 興野 聖人	常陸太田市立水府小学校 教諭	幅広い人間関係や社会性を育てるカリキュラム・マネジメント ～地域資源の活用をととして～ 本研究では、地域資源を活かしたカリキュラム・マネジメントを展開することで、社会性の育成に寄与する取り組みのあり方について明らかにしたい。所属する学校は、小規模校で幅広い人間関係や社会性を育てるために、地域の協力を得て改善できないかと考えた。すなわち、地域資源の活用と授業改善を柱とし、校務分掌を踏まえ、全職員が協働して取り組めるカリキュラム・マネジメントについて実践したい。
24	山形大学大学院	大学院2年	ウシクサ マナブ 牛草 学	名取市立下増田小学校 教諭	地域と連携した学校防災の推進 —東日本大震災時の避難所運営経験を踏まえて— 東日本大震災では多くの学校が避難所となり、地域を支える学校の機能が改めて注目された。教職員が運営の中心的役割を担った学校がある一方で、地域住民による自主運営がなされた事例も存在する。地域と連携した学校防災モデルの提示を目的として、現地調査を含む事例収集と授業や教員研修等に参画する協働の実践に取り組んだ。
25	信州大学大学院	大学院1年	モリヤマ トモユキ 森山 知之	須城市立豊洲小学校 教諭	「チーム学校」地元のスタッフとのつながりと教職員同士のつながり（同僚性）に関する研究 ～「つながり」のための「人」「こと」「場」を手がかりに～ 「チーム学校」を外部のスタッフとのつながりと教職員同士のつながりの両面から研究している。外部スタッフに関しては、「地元」の人材・組織と連携することの有用性や可能性について報告する。教職員の同僚性に関しては、教師同士の「観」のふれあいが、同僚性の高まりには重要であると考えられる。現在の学校現場で可能な「観」のふれあいの場づくりや方法について、自校の現状の実践をふまえて紹介する。
26	常葉大学大学院	大学院1年	タカダ オオキ 高田 直樹	富士市立富士見台小学校 教諭	子どものための「チーム学校」の推進に向けた教員の多忙化解消に関する基盤的実証的研究 本研究は教員の多忙化解消に向けた基盤的実証的研究を目的としている。教師の業務実態に関わる質問紙調査と観察調査の結果、教師の仕事は①同時並行的・複線的である②突発的な対応を瞬時に求められる③多くの業務を一人で背負っている④自分の判断でコントロールできない⑤終わりが見えにくいなどの特質が明らかになった。教師の日常的に埋め込まれている多忙の実態と多忙感の現実を解消する手立てを実験的に探っていく。
27	大阪教育大学大学院	大学院2年	キダ テツオ 木田 哲生	堺市立三原台中学校 教諭	「みんいく」を通じた学校の生徒指導機能の向上に関する実践的研究 勤務校の長年の学校課題である不登校改善を主目的として、「みんいく（睡眠教育）」実践研究に取り組んだ。教育と医療の連携「教医連携」を軸に「睡眠調査」「みんいく授業」「個別面談」「教材開発」などを実践し、不登校の3割が改善するなど、学校改善が進む。さらに校内での組織開発に加え、学校と地域（PTAや地域住民、幼保小高、保健センターなど）との連携組織を立ち上げ、地域全体で協働的に「みんいく」を推進している。
28	奈良教育大学大学院	修了生	カガミ ミホ 香美 美穂	奈良県立郡山高等学校 教諭	高等学校における自己指導能力を高める指導プログラムに関する研究 生徒たちのなかには、生きることにつまずき、迷う生徒も少なくない。そのような生徒の現状に対し、解決志向アプローチ（Solution Focused Approach）の考え方を取り入れた自己指導能力を高める指導プログラムを構築し、問題行動に対する個別指導、また、学級の生徒全員を対象とする授業に導入した。その結果、自ら前進しようとする意欲や態度が見られるようになり、教師には、これまでの生徒指導に対する意識に大きな変革が起こった。
29	和歌山大学大学院	大学院1年	ハシモト カズキ 橋本 和輝	日高川町立笠松小学校 教諭	集合学習を通して、過小規模校における主体的に学ぶ力を育成する ～ふるさとの未来を創造していく子を通して～ 本研究は、過小規模校の三つの小学校が集合学習を行うことで、児童の学習意欲を高め、主体的に学ぶ力を身に付けさせる取組である。三校共通の地域学習に関するカリキュラムを編成し、「分習」（各校での学習）や「全習」（三校での集合学習）など学習形態を工夫し、学習の深まりや広がりを図っていく。ICT機器を有効活用し、三校間をテレビ会議システムでつなぎ、学習成果をホームページで発信する。
30	鳴門教育大学大学院	大学院2年	ミキノ ヒロユキ 三木野 博之	徳島県立城西高等学校 教諭	自立した社会人を育む組織的・計画的な教育活動の展開 —高等学校総合学科における系統的なキャリア教育を通して— 所属校では、「産業社会と人間」を中心に自己の進路への自覚を深める学習を進めているが、学習活動の系統性と組織的な運用が不十分であり、より効果的な指導体制・指導内容の確立が求められていた。そこで、キャリア教育のあり方を検証するとともに、総合学科の根幹である「産業社会と人間」を中心に取組を進めたキャリア教育推進のためのカリキュラム開発及び指導体制の構築について、具体的な授業の実践を含めて発表する。
31	福岡教育大学大学院	大学院2年	イズミ ノアキ 泉 徳明	北九州市立足立小学校 教諭	小学校からの「荒れ」の予防に関する研究 ～中学校区の3小学校におけるSEL-8Sプログラムの共同実施を通して～ 「荒れ」を予防し児童の学校適応を促すため、社会性と情動の学習のSEL-8Sプログラムを実践した。在籍小学校での試行では、短期間の児童の変容は難しく継続的な実践が必要なこと、教師への支援による時数確保と授業の質向上が必要となった。次に、実践を中学校区3小学校に拡張し、SEL-8Sを活用した学校連携の在り方の検討を図ったところ、組織づくり、職員研修、教師への支援等により、各校で着実に実践が重ねられている。

教職大学院の学修成果に係るポスターセッション発表者一覧

平成28年度

番号	大学院名	区分	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
32	帝京大学 大学院	大学院 1年	ホシノ 星野 留美	神奈川県立相模原中央支援学校 教諭	これからの特別支援学校センター的機能の在り方に関する一考察 インクルーシブ教育の推進に伴い、特別支援学校のセンター的機能の在り方が問われている。本研究では、ある地域の支援教育に焦点を当て、特別支援学校のセンター的機能の実態調査、小中学校の支援教育コーディネーターへのアンケート調査及びインタビュー調査を通して、地域の支援教育拡充のために特別支援学校の担う役割を改めて整理するとともに、特別支援学校のセンター的機能の在り方を見直し、考察する。
33	新潟大学 大学院	大学院 1年	タテオカ 館岡 シンヤ 信也	見附市立見附小学校 教諭	学校と地域が理念を共有する学校づくりに向けて ～学校と地域が求める資質・能力を基にした地域連携を目指して～ 在籍校では、コミュニティスクールを導入し、「地域に学び、地域でつながり、地域を創る学習」の展開に努めているが、児童の自己肯定感や自己有用感の育成が課題となっている。そこで、学校と地域とが理念を共有した「社会に開かれた教育課程」の推進が必要と考え、職員意識調査やコミュニティ会議の省察を行った。その結果、自己肯定感や自己有用感の育成に繋がる身に付けさせるべき資質・能力の内実が見えてきた。
34	富山大学 大学院	大学院 1年	ミヤマト 宮本 ムネトシ 宗智	上市町立上市中央小学校 教諭	教職大学院での学びと、教師としての専門性の高まりについて 富山大学教職実践開発研究科は、理論と実践の統合を図り教師としての専門性をより高めることを目的として本年4月に開設された。本研究科での学びにより、教育に対する俯瞰的な見方の芽生えや教育観の再構成など、学び合う専門職としての成長を実感している。それらをもたらししている講義、多様な背景を持つ院生との学び合い、県総合教育センターと連携した実習、学びの省察といった、本研究科での学びを分析する。
35	福井大学 大学院	大学院 2年	キタムラ 北村 ヒロシ 仁志	高浜町立高浜中学校 教諭	つながりあう教師のコミュニティ育成を目指して 本校の研究主題は、「『わかった』『できた』と実感できる授業づくり～教材とつながり、生徒同士でつながる学習指導の工夫を通して～」である。「つながる」をキーワードとして、教員同士もつながり合うコミュニティを育成するために、これまで協働しながら取り組んできた。特に、今年度は職員の半数近くが入れ替わり、若手の職員も大幅に増えた。そのような状況下で、同僚性を高めながら研究を進めてきたことについて発表する。
36	岐阜大学 大学院	大学院 2年	ミヤシタ 宮下 ナオキ 直樹	揖斐川町立清水小学校 教諭	子ども・教師・保護者が主体的に取り組む授業開発と校内研究の改善 子どもの主体性を伸ばすため、従来の校内研究の発想を転換させた開発実践である。教師がデザインした枠にあてはめる授業を、「子ども自身の見通しと、学びの振り返りを大切に授業づくり」へ転換。トップダウンになりがちな校内研究を、「教師が主体となるボトムアップ型校内研究」へ転換。保護者に対して閉ざされている校内研究を、「保護者との双方向の連携を位置付けた開かれた校内研究」へ転換する。
37	京都教育大学 大学院	修了生	オオサキ 大崎 ナオコ 直子	与謝野町立山田小学校 教諭	学校づくりにおける「協働」の実践と省察 学校現場においては様々な課題に対応していかなければならない現状があり、その克服のためには戦略としての「協働」を創りだしていく必要がある。教職大学院在学中は、学校経営戦略としての「協働」とはいかなるものか、研究を進めてきた。学校現場に戻り、児童の実態や組織の実態を踏まえ、教職員の「協働」の必要性を感じているが、自身の戦略としての「協働」のイメージと勤務校での実践を省察し報告する。
38	山口大学 大学院	大学院 1年	ムロウチ 室内 フミヒコ 文彦	光市立大和中学校 教諭	小中連携教育を核としたコミュニティ・スクールの推進 －1中4小施設分離型中学校区における改善プランを通じて－ 教職大学院入学後8ヶ月の学修成果を、次の2点に焦点化して発表する。第1に、「ユニット型研修」に着目し、1中4小の教職員及び学校運営協議会委員、近隣他校の教員から成る「混成型ユニット」を編成し、小中連携教育の推進を促した。第2に、先進校視察を踏まえ、コミュニティ・スクール改善プラン（組織再編を軸とした5つのプラン）を立案した。現在、平成29年度実施に向け、調整作業・環境整備を鋭意進めている。
39	愛媛大学 大学院	大学院 1年	イノ 猪野 ケイシロウ 啓士郎	松山市立清水小学校 教諭	教職員が主体的に取り組む法令順守・危機管理についての校内研修プログラム開発 －「SCAP (School Compliance Active Program)」の提案－ 学校組織には、信頼構築のためにコンプライアンスの遂行や危機管理を行う発想が必要である。教育公務員として、信頼を損なう不祥事や服務事故はあってはならない。そこで全教職員が主体的に取り組める法令順守や危機管理についての研修プログラムを作成し、よりよい学校運営に生かしたいと考えた。それをSCAP (School Compliance Active Program) と名付け、提案する。
40	大分大学 大学院	大学院 1年	カシハラ 梶原 ヒデオ 秀雄	日田市立南部中学校 教諭	メンターチームによる若手教員の授業力育成の学習システムづくり 教員の大量退職が続く大分県では、ベテラン教員から若手教員への授業力の確実な継承を図る体制づくりが喫緊の課題である。若手教員の授業力育成を図るには、プロジェクト型組織としてメンターチームを立ち上げ、省察に基づく授業研究を進める必要がある。このような学習システムを構築することで、若手教員の授業力の向上のみならず、ミドルリーダー等のマネジメント力が向上し、学校組織の活性化も期待できる。
41	琉球大学 大学院	大学院 1年	ウチヤマ 内山 ナオミ 直美	糸満市立糸満中学校 教諭	主体的・協働的に取り組む校内研修 －学び合う教師集団の構築をめざして－ 激動の21世紀を生き抜く児童生徒に必要な資質・能力として、「キー・コンピテンシー」や「21世紀型能力」などが注目されている。同時に、その担い手である教師の資質・能力の向上も今日的課題とされ、専門的な知識及び授業を行うスキル等の実践的指導力を高めることが求められている。本研究では、教師にとって一番身近な校内研修を取り上げ、同僚性を構築しながら、共に学び成長する機能としての校内研修の可能性を模索した。